

主計式の甃と出土土器のハソウ

Hasō 甃 in the “Procedures for the Bureau of Computation” and Earthenware *Hasō*
SAKAI Kiyoji

酒井清治

はじめに

三宅米吉は、「上古の焼物の名称」の中で、「甃」について、「式にツチタラヒと訓みたれども誤りなり、又匱と書いて之をハサウと訓みあるも仮名違へり。式と儀式とを比較すれば甃と匱とは同じものなり而して儀式に之を波佐布とも記せり。されば甃も匱もハサフとよむべきなり。和名抄漆器類の中に匱あり、曰く「説文云匱 初爾反、一音移漢語抄並俗用_椽字、所_レ出未_レ詳、或説云、此器有_レ柄半挿_レ其中_レ故名_レ手挿_レ也 柄中有_レ道可_レ以注_レ水之器也」と、又澡浴具にもありてそこには和名波邇佐布とあり和名抄の註によれば甃の匱に同じきこと益々明かなり、即ち俗椽字を用ふと云ふは木製なるが故に椽字を用ふるにて瓦製なれば甃字を用ふべきなり。さて波佐布を半挿といふは音便より附会せしなり。波佐布の意明かならず。後世のハンゾウとハサフとは同じものにはあらず。和名抄は既に之を混淆したり。」とする。

このように甃は竹管を挿す器形として、文献と考古学において合致することから、複合的な視点で研究が出来る器形である。

甃は、『延喜式』、『和名抄』に記されるように手水を入れる器形とするが、考古学では一般的に人物埴輪が持つ仕草から酒を入れて儀礼などで注ぐ器形と考える場合が多い。内容物や用途の違いがあるのか検討してみる。

また、このような甃は、主計式などで貢納した国が記されているが、出土するハソウが古代においてどこで作られ、どのように変化したのか、また、平城京の資料と比較検討を行い、いつまで存続する器形か探ってみる。さらに、注口を持つ器形として甃と多志羅加があるが、その関係についても触れてみたい。

なお、甃の文字は、文献と引用文はそのまま「甃」、「匱」を使い、出土品に関する資料は「ハソウ」と記述する。

1 考古学資料によるハソウの変遷

考古学における須恵器の変遷は、森浩一、田辺昭三、中村浩の成果がこれまで使われてきた。ハソウのみを見ると、小池寛の容量・形態から見た変遷があり、変化が捉えやすいので引用したい。

小池寛によれば、須恵器初現期 TG (梅) 232 型式のハソウは 120cc (小池はリットルを使うが

ccで表記した), 文様がなく統一化されていない器形である。ON(大野池)231型式では260ccで波状文が付されるものの, やはり形態の統一はない。定型化以後200cc前後となり, 形態も共通し, 5世紀後半のTK(高蔵寺)23・TK47型式には100cc近くに小型化する。6世紀以降のⅡ期のハソウはMT(陶器山)15型式で長頸化とともに約140ccとやや容量は増えるものの, その後細頸化し容量は100cc近くに減少する。Ⅱ期は小池が「ハソウの大画面」というように, 古墳に副葬され葬送儀礼と関わる器形として使用されている[小池1999]。容量も減少することは, 次の矮小化につながることであるが, 東海地方ではミニチュアハソウや, 孔が5mm前後と竹管を挿すことが出来ないハソウが見られるようになる。

ハソウはⅢ期の7世紀には矮小化が進み, 50cc前後で形骸化を表すという。ところが, Ⅳ期の奈良時代に入ると容量が100cc強と増加して再び大型化することは, 古代の甕の用途を考える重要な視点である。

このようにハソウは, Ⅰ期前半が250cc前後と最も容量がありその後減少していくが, Ⅰ期には500~900ccの大型ハソウや樽形ハソウがあることから, このような容量の大きなハソウが本来の形であろう。Ⅰ期からⅡ期にかけて順次容量が少なくなっていくものの, ハソウの形態は保っていく。7世紀になると高台や短注口を付ける地域もあり, その系譜は8世紀初頭あるいは前半で消滅するが, 尾張では8世紀第3四半期, 美濃では8世紀第4四半期まで存続する。

8世紀になると大型ハソウが再び見られるようになる。美濃では8世紀初めの岐阜市老洞窯で, 胴径20cm以上, あるいは口径25cmほどの大型ハソウが出土し, 8世紀第4四半期の各務原市稲田山13号窯で, 肩部径16.4cmのハソウが見られる(第1図)。また, 平城京では平城宮土器Ⅲ以降に口径20cmの大型ハソウや胴径20cmの壺型ハソウが出土する(第4図)など, 大型ハソウの出現を考えると奈良時代にハソウの用途の変化が想定される。

2 文献から見た調納国—甕を中心に—

『延喜式』に見られる須恵器調納国は摂津, 和泉, 美濃, 播磨, 備前, 讃岐, 近江, 筑前の八国である。そのうち甕は和泉8口, 美濃10口, 備前12口がみられる。踐祚大嘗祭式17雑器条では河内, 和泉, 尾張, 参河, 淡路, 備前のうち, 甕(匱)は尾張16口, 参河60口, 備前30口がみえる。斎宮式では66供新嘗料条は美濃だけで匱8口が, 71年料供物条では美濃に匱1口がみえる。

荒井は『延喜式』の土器研究について, それまでの研究を下記のように文献資料を中心にまとめられているが, 甕について引用してみよう[荒井2005]。

- ① 甕は須恵器で, 主計式以外では匱・椀に作り, 『儀式』には「波佐布」ともある。また半挿にも作る。
- ② 『延喜式』では, 甕は土器, 匱は斎宮式43雑備雑物の「漆匱」を除き土器, 椀は斎宮式14初斎院装束条の「椀一合」と内匠式31伊勢署斎院条の「椀一合(高一尺, 周二尺四寸)」があるのみ。この二例のみ員数単位を合とするので蓋が付く木器。
- ③ 『和名抄』に「柄中有_レ道, 可_レ以注_レ水之器也」と胴部の小さい孔に竹管をつけ, 手洗い水などを入れる容器で, 造酒式に「陶匱六十口…、篋竹卅株(作_レ匱口_レ及篩柄料)」とある。

【『和名抄』澡浴具に「匱 説文云匱(移(ママ)璽反, 一音移, 和名波邇佐布), 柄中有_レ道,

可_レ以_レ注_レ水之器也、俗用_レ椀字_レ、所_レ出未詳。但和名之義、或説云有_レ柄半挿_レ其内_レ故、呼為_レ半挿_レ也」とあり、また漆器類には「匱 説文云匱〈初璽反、一音移、漢語抄并俗用_レ椀字_レ、所_レ出未詳、或説云此器有_レ柄半挿_レ其中_レ、故名_レ半挿_レ也〉、柄中有_レ道、可_レ以_レ注_レ水之器也」とある。】

- ④『延喜式』で土器の甗は、主計式の「甗」のほか、「匱」があり、四時祭式上・下と造酒式に類出するようである。斎宮式にもみえ、いずれも神祭用である。
- ⑤『枕草子』にある「はんぞう」は木器で、『今昔物語集』の椀も木器とする。
- ⑥ 貢納・容量として、1条に正丁一人当たり「十口〈受_レ五升_レ〉」の貢納規定がある。国別諸条では和泉国から八口のほか畿外的美濃国から十口、備前国から十二口の貢納があり、また斎宮式66 供新嘗料条に美濃国産の匱八口、同71 年料供物条に美濃国産の匱一口がみえる。さらに、大嘗祭式17 雑器条に尾張国産匱十六口（荒井論文はこれを脱す）と三河国産の匱六十口、備前国産の匱二十がみえる。『儀式』二は「匱」、『儀式』四は「甗」の字を使っている。

大嘗祭式17 雑器条に、河内、和泉、尾張、参河、備前の五国（宮内式15 条では参河国に代わり美濃国）へ宮内省の史生を遣わし、神御に供する雑器を作らせている。その中で、匱を尾張国16 口、三河国60 口作る。『訳注日本史料 延喜式』上の頭注で三河国について、「宮内式15 条において史生を差遣する対象国が「尾張、美濃両国」と三河国ではなく美濃国となっているのは、平安期の三河当国の窯業事情が反映したものであろう。むしろ美濃国のほうが尾張国につながる陶器の大生産地として著名である。」とする〔虎尾編2000 p405、岡田荘司執筆頭注〕。

3 考古学から見た調納国のハソウ

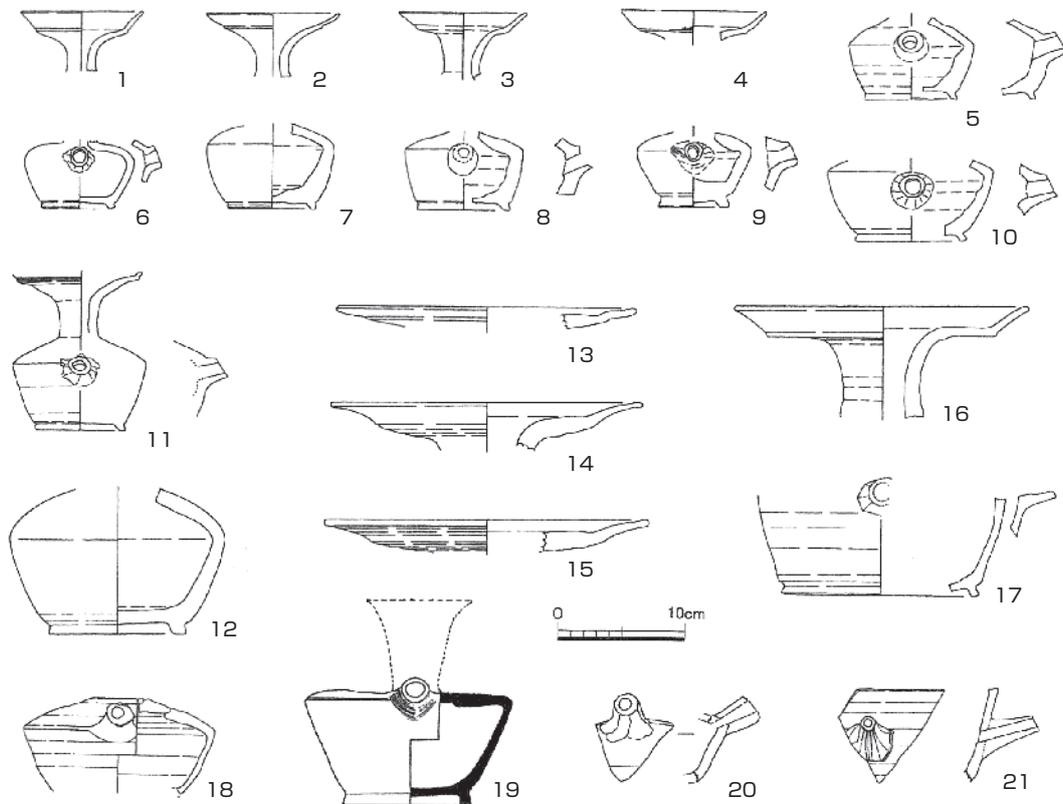
美濃窯

美濃国の甗は主計式美濃国条に10 口、斎宮式では供新嘗料条に8 口、年料供物条に1 口見えるが、考古学的にも奈良時代にハソウが焼成されている。

老洞窯〔岐阜市教育委員会1981〕の時期は710～730 年と考えられており、平城宮土器Ⅱ並行である。多くのハソウが出土し、一般的な大きさとともに中型・大型があり、特に大型が多いことは注目される（第1 図1～17）。孔の大きさも異なることからそのような器種があったことは認識されていたため、酒造式の中に「小匱」が見えるのであろう。老洞窯跡は、「美濃国」印の須恵器が出土することも特徴で、ハソウが出土することと関わりがあろう。

奈良時代のハソウは細い頸部から大きく外反して開き、外傾する口縁に至る形態や短注口を付けることは尾張と共通する。しかし、老洞窯の方が器高よりも最大径が大きく、高台径も広い安定感がある。なお、老洞窯は器壁が厚い例が多いため、内容量は少なくなる（第1 図5・7・8）。

老洞窯に続くハソウは不明確であるが、各務原市太田3 号窯は、美濃須衛Ⅳ期第2 小期で8 世紀中葉とする（第1 図18）。この器形は肩部径15.2cmと中型で肩部が鋭角に屈曲する〔各務原市埋蔵文化財調査センター1996〕。その後再びハソウが出現するのは長岡京期とする各務原市天狗谷4 号窯（第1 図20）〔各務原市埋蔵文化財調査センター1998〕、8 世紀代4 四半期の稲田山13 号窯（第1 図19）〔各



第1図 美濃国のハソウ

1~17. 岐阜市老洞1号窯 18. 各務原市美濃須衛窯太田3号窯 19. 同美濃須衛窯稲田山13号窯 20. 同美濃須衛窯天狗谷4号窯 21. 同美濃須衛窯船山北5号窯

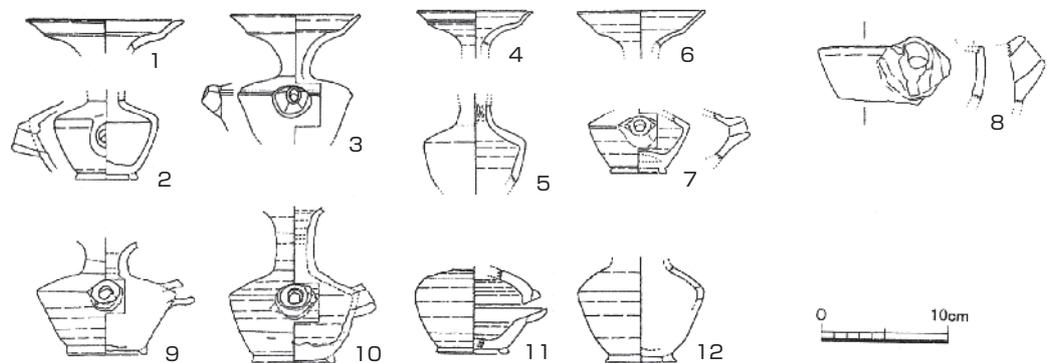
務原市 1981]である。天狗谷4号窯例は、約3cmの長い注口が付くことから、新しい形態といえよう。平城宮の美濃須衛窯の須恵器が見られるのは8世紀前半までで、その後甕だけが8世紀後半まで見られるようである。8世紀後半にハソウの生産が少なくなることと関わりがあろう。

各務原市船山北5号窯灰原出土の注口を持つ土器は、鉢で大きく広がる口縁部上位に面取りした注口が付く(第1図21)。この注口は約4cmの長さの注ぐ機能を持つ。この器形は8世紀後半と考えられているが、鉢形の類例のない器形で、ハソウといえないであろう[岐阜県文化財保護センター2000]。しかし、木器の椀は蓋を被せる形態であることも、『今昔物語』卷二八の二九に角の生えた怪物が匣を被った犬であった[荒井2005]とあることを考えると、被ることの出来る器形はこのような鉢形の注口土器であったことが考えられる。

尾張窯

尾張は主計式の調納国ではないが、踐祚大嘗祭式で匣16口見られる。考古学的にも奈良時代のハソウは、継続して生産する国である。

日進市岩崎41号窯(I-41号窯式)が7世紀第4四半期で高台とともに肩が張る胴部で、頸部と口縁は大きく開く(第2図1・2)。8世紀第1四半期の春日井市高蔵寺2号窯(C-2号窯式)(第2図3)[愛知県教育委員会1983]もほぼ同一形態であるが、肩部が直線状となり縦断面五角形に近く



第2図 尾張国・三河国のハソウ

1・2. 日進市岩崎41号窯 3. 春日井市高蔵寺2号窯 4・5・8. 春日井市神屋1号窯
6・7. 春日井市桃園1号窯 9. 豊橋市中田B・C古窯5号窯 10. 豊橋市中田B・C
古窯4号窯 11. みよし市K-41号窯 12. 刈谷市井ヶ谷67号窯

なる。美濃老洞窯跡よりも底径が小さいのは、古墳時代から続く丸底に削り出す底部の系譜上にあつたためであろう。同じくC-2号窯式の春日井市桃園1号窯は、肩部の屈曲が鋭角で体部も直線的な五角形を呈する（第2図6・7）。続く8世紀第2四半期のみよし市K-41号窯（I-25号窯式）は、胴部が丸みを持つことが特徴で、短注口も胴部中位のやや下方に付く（第2図11）。次の刈谷市井ヶ谷67号窯は、以前はNN-32号窯式に含まれていた（第2図12）[愛知県教育委員会1980]が、県史では位置づけは不明である。この特徴は、孔に注口は付着せず、瓶類の影響を受けたためか胴部がやや縦長になる。高台部は、NN-32号窯式の瓶類と同様、台形になることから同窯式に近い8世紀第3四半期の製品といえよう[愛知県史編さん委員会2015]。

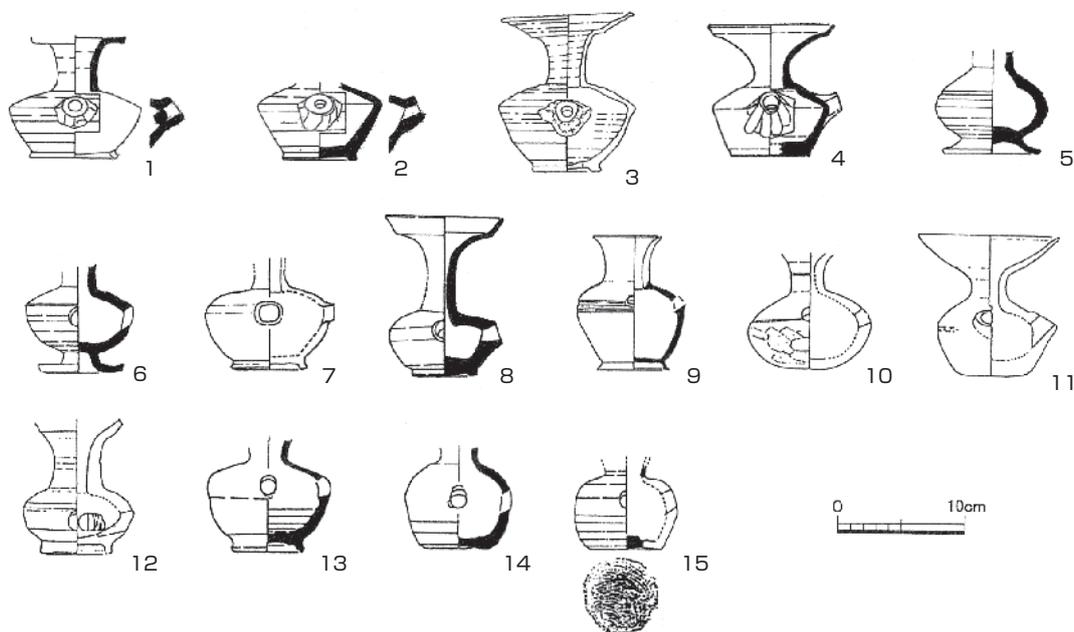
尾張には美濃老洞窯のような大型ハソウは確認できないが、春日井市神屋1号窯（C-2号窯式）の平瓶は、図から判断するに平瓶の口縁と思えず、ハソウの可能性はある。ハソウとすれば短注口の内径が2cmと太く、器壁は薄いものの大型ハソウのと考えられる（第2図8）[愛知県史編さん委員会2015]。

尾張のハソウは、主計式上に貢納はなく、大嘗祭式17雑器条に匣16口が見られるのみであるが、尾張のハソウの生産は一定量継続して8世紀第3四半期を終焉としたのであろう。

三河国

三河国では大嘗祭式17雑器条に匣を尾張国16口、三河国60口作ることが見える。前述したように三河国の匣60口から見れば、9世紀の出土品は確認できなく、8世紀のことであろう。

三河国の豊橋市中田BC古窯址4号窯・5号窯出土ハソウは、肩部の屈曲が鋭角で体部も直線的な縦断面五角形で、8世紀中頃から後半の時期とする（第2図9）[愛知県史編さん委員会2015]。このような形態は、尾張の春日井市桃園1号窯と類似することから両国で同形態が作られたのは大嘗祭式17雑器条で共に匣を製作しているためであろう。しかし、ハソウの生産はわずかである。隣接する湖西窯を含めたとしてもハソウを生産しているのは、湖西窯では8世紀初頭までであり、三河のハソウ生産の実態はわずかであろう。



第3図 各地のハソウ（7世紀も含む）

1・2. 静岡県湖西市吉美中村遺跡 3. 浜松市東区半田山 A7 号墳 4. 三重県明和町斎宮跡第70-1次調査
5. 大阪府堺市陶邑窯 TG64号窯 6. 同 TK116号窯 7. 同 KM22号窯 8. 兵庫県三田市地福3号窯 9. 丹波市山垣遺跡
10~12. 岡山県瀬戸内市邑久窯跡群寒風1号窯 13・14. 鳥根県松江市出雲国庁跡 15. 松江市別所遺跡

また、甕と類似している多志羅加を三河で作ることが大嘗祭 17に見られるが、注口を持つ器形は三河では出土していない。

湖西窯

湖西窯は遠江国なので『延喜式』等文献には見られない。しかし、三河国と接した古墳時代からの大窯跡群であり、その窯跡群の一部は三河にまで広がる。踐祚大嘗祭式で三河国が60口もの甕を納めていることを考えると、8世紀にもハソウを焼成している湖西窯を含めて検討する必要がある。

後藤は、湖西市吉美中村遺跡の短注口と高台が付き、細頸で、肩部が鋭角に屈曲するハソウを7世紀末においた（第3図1・2）〔後藤 2015〕。胴部は縦断面五角形で、尾張の春日井市桃花園1号窯例に類似する。

鈴木敏則は、これまでの編年ではV期（初）前にハソウがありその時期以降消滅するとしたが〔鈴木 1999〕、その後ハソウはV2期まで続き、それ以降消滅すると改めた〔鈴木 2014〕。その編年ではV2期前は平城Ⅱの720年前後に並行するようである。V1期が700年を中心とする時期で、古墳時代から続く無高台の丸底ハソウと高台の付くハソウが共存し、後者は肩部が鋭く屈曲する（第3図3）。なお、両者とも頸部から口縁部へは段をなして移行する。

湖西窯ではⅢ-4の7世紀前葉にはハソウに短注口が付けられる。尾張ではⅢ-1小期、H-15窯式

期、7世紀第2四半期に短注口が見られる。美濃須衛窯でも同様に須衛市立南（いったち）1号窯で7世紀第2四半期頃と想定されており、東海ではほぼ同時期に短注口を付けるハソウが出現する。

陶邑窯

堺市を中心とした陶邑窯は日本最大の須恵器生産地であるが、9世紀には須恵器窯は減少している。主計式では甕8口を調納しているが、考古学的には8世紀のハソウの生産は不明確である。

陶邑窯跡群では、TG64号窯で無台と台付き（第3図5）の二種があるが、高台ではなく7世紀中葉と考えられている[大阪文化財センター 1978]。TK116号窯（第3図6）も台脚が付き大小の坏Gと伴うことから、7世紀後半といえるが古相である[大阪文化財センター 1979]。TK43-1号窯のハソウは、注口はわずかに突出しただけで、脚台は八の字に広がり体部は丸みを持つことが特徴であり[大阪文化財センター 1982]、東海よりも早く6世紀末に短注口が出現する。

陶邑窯には中村浩編年Ⅲ型式2段階（7世紀後半）の高台付ハソウがあり、胴径8.5cmと小型である[中村 2001]。これ以降のハソウは不明確である。

邑久窯跡群

備前国は主計式で甕を12口調納し、踐祚大嘗祭では30口納めている。しかし、考古学的には邑久窯跡群の調査は少なく、8世紀のハソウは不明確である。

岡山県瀬戸市寒風1号窯灰原で3個体確認できたが、1点は高台付きであり、2点は平底と丸底である（第3図10～12）。11の平底には短注口が付くが、高台を持つ12は孔が水平やや上方を向いてあけられており、液体を容れ注ぐ機能を持っていない[岡山県教育委員会 1978]。時期は寒風1-I式（寒風3式）（7世紀末～8世紀初頭）であり、その後のハソウは不明確である[亀田修一ほか 2014]。

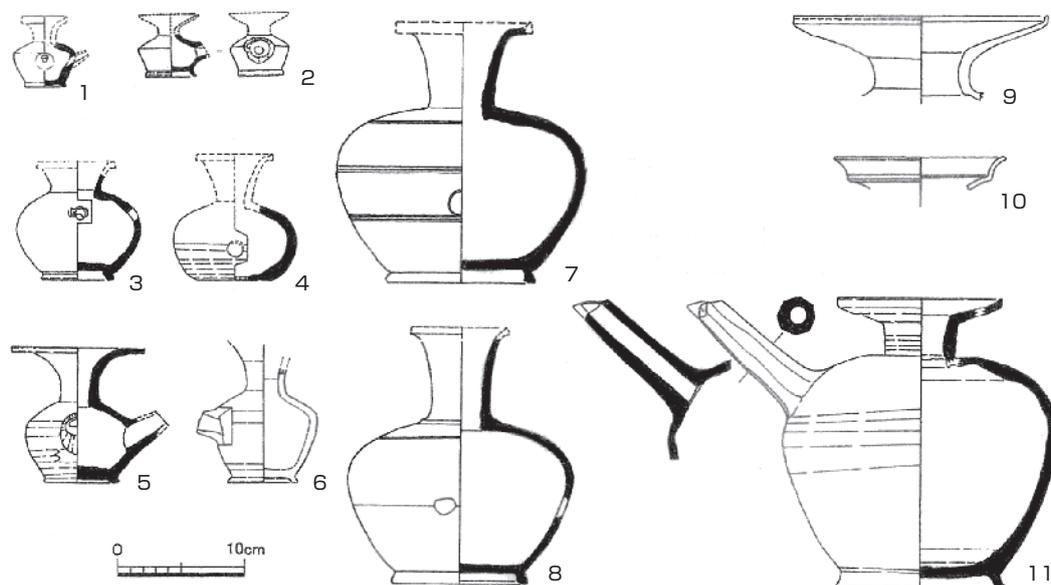
平城宮・平城京のハソウ

主計式の調納国など各地の生産地から納められたのであろうが、平城宮だけでなく平城京の広い範囲で出土する。その中で、ハソウが平城宮よりも平城京域で出土することは、土器の入手方法、ハソウの使用目的、使用方法が一様でなかったことが想定できる。

薬師寺 SE037 で胴部が縦断面五角形の高台の付いたミニチュアハソウ（第4図1）が出土している。土師器・黒色土器・須恵器から「平城宮Ⅰ」と「平城宮Ⅱ」との中間に位置付けられ、尾張の編年C-2号窯式と考えられ、710年以降とする[奈良国立文化財研究所 1987]。肩部径5cmと小型で水注と考えられている。口頸部と注口部を欠失しているが、孔部の基部接合痕から注口の装着が想定されている。

右京三条二坊からも類似したハソウ（第4図2）が出土し、尾張産とする[巽 1998]。短注口を持ち高台径が広く、美濃産の形態に類似する。これも水注と考えられる。

平城京左京七条一坊十五・十六坪 SD6400 のハソウ（第4図3）は、高台を持つものの丸壺形態で頸部は太く、注口は付かないことから湖西・尾張・美濃の系譜と異なる[奈良国立文化財研究所 1997]。



第4図 平城宮・平城京のハソウ

1. 奈良市薬師寺 SE037 2. 同平城京右京三条二坊 3. 同左京七条一坊十五・十六坪 SD6400 4. 大和郡山市平城京左京八条一坊十三・十四坪 SD1500 5. 奈良市平城宮跡平塚1号墳 6. 平城京左京三条二坊十一・十二・十三・十四坪 7. 同左京九条三坊十坪 SE3755 8. 同東堀河 SD1300 9・10. 同左京三条二坊 SD5100 溝状土坑 11. 同三条大路 SX0603 廃棄 I

平城京左京八条一坊十三・十四坪 SD1500 のハソウ（第4図4）は、やや扁平な球胴で、平底に糸切り痕が見られる。孔は注口部がなく位置も胴部下位にあくことは、新しい様相のようである〔大和郡山市教育委員会 1990〕。このような球胴で平底の器形は陶邑 KM226 号窯 B 区灰原に見られる〔大阪府教育委員会 1994〕。

平塚1号墳は、平城京条坊設置時に前方部および周濠の破壊を受けたようである。ハソウが出土するが、高台と長い注口が付き、肩部が丸く、口縁はラッパ状に開く（第4図5）。形態から東海の製品と異なるが、産地は不明である。時期についても不明確であるが、長い注口であることから、8世紀後半代にくだる可能性がある〔奈良国立文化財研究所 1975〕。

平城京左京三条二坊十一・十二・十三・十四坪のハソウ（第4図6）は、短注口で高台が付くが、肩部はやや丸みがあり、器高が高い特徴を持つ。出土遺物の多くが8世紀末から9世紀初頭とするが、尾張の井ヶ谷67号窯に近い形態から8世紀後半であろうか〔奈良県立橿原考古学研究所 2015〕。

平城京左京九条三坊十坪 SE3755 の大型ハソウ（第4図7）は、壺 L とされる器形であるが、胴部下半にハソウと共通する斜め上方を向く孔があげられる〔奈良国立文化財研究所 1986〕。孔の位置や器形などハソウの系譜から逸脱する。平城宮Ⅲ～Ⅳ、730～767年であることから、この頃にはハソウの系譜上にはない目的も異なる形態が作られたのであろう。この点は後述する。

平城京東堀河 SD1300 の壺 L（第4図8）は、胴部最大径直下に焼成後の穿孔がみられる〔奈良国立文化財研究所編 1983〕。左京九条三坊十坪 SE3755 と類似した壺形態で、孔も胴部下半に開くことは注目できる。しかし、外部から打撃により穿孔した孔であり、正円でないことから竹管を挿した場合、孔の隙間から漏水すると考えられ、使用できたのか疑問である。奈良時代後半と考えられており、壺 L の形態であることから、この時期共通する目的で作製された可能性がある。

平城京左京三条二坊 SD5100 溝状土坑のハソウ 2 点は、口縁部のみで大型は 20.3cm、中型は 13.5cm である（第 4 図 9・10）[奈良国立文化財研究所 1996]。特に大型は、頸部が太く口縁部は外傾して開き、口唇端部が短く直立する類例の少ない器形である。両者とも尾張産で、平城宮Ⅲ、730～750 年と想定されている[愛知県教育委員会 2015 p609]。

平城京三条大路の SX0603 廃棄Ⅰから出土した大型ハソウ（第 4 図 11）は、胴部は壺形態で八角形に面取りされた 11cm と長い注口が付けられていることが特徴である[奈良県立橿原考古学研究所 2011]。頸部は直立したのち、屈曲し大きく皿状に開く口縁で、口唇部には端面が作られる。左京三条二坊 SD5100 溝状土坑のハソウ（第 4 図 9）と同形態であることから、尾張産の可能性はある。堆積は上層（廃棄Ⅱ）と下層（廃棄Ⅰ）とに二分できるが、時期は、いずれも平城宮土器Ⅴで 762～784 年を中心とする時期とする。

調納国と平城宮・京のハソウ

調納国、特に美濃・尾張・三河と湖西を含めた東海のハソウは、継続的に製作され変遷が把握できる。いずれも 7 世紀前葉には短注口が付き始め、7 世紀末には高台が見られるものの、無高台も存在する。陶邑では 7 世紀前半に台脚が付き、KM22 号窯（第 3 図 7）に高台が見られる。備前では寒風 1 号窯にハソウが 3 点（第 3 図 10～12）確認できるが、高台付きは 1 点だけで、短注口も平底に 1 点である。

調納国ではないが松江市出雲国庁跡に高台付きと平底のハソウ（第 3 図 13・14）があるが、いずれも注口は付かない。また、松江市別所遺跡のハソウ（第 3 図 15）は平底で回転糸切りが見られることから 8 世紀前半である[柳浦 2001]。兵庫県三田市地福 3 号窯（第 3 図 8）、丹波市山垣遺跡（第 3 図 9）にも見られるが、形態は各地で特徴があり、ハソウが統一した形態を持たなかったのは、消滅しかけた器形であったためであろう。その中で、美濃・尾張・三河・（遠江）でほぼ共通する形態が生産されたのは、踐祚大嘗祭式 17 雑器条に見られるように、雑器は宮内省の史生を遣わせて監造させたことと関わりがあるが、河内・和泉・備前に共通する器形が見られない。

平城宮と平城京出土のハソウは、調納品がどれか不明であるが、生産地の製品と比較してみよう。8 世紀中葉頃まで体部縦断面五角形で短注口を持つ尾張産が見られ、東海からの搬入が多いといえる。胴部が丸い壺型のハソウが見られるが、短注口を持たないことから東海の製品と相違する。産地は不明であるが、平城京左京八条一坊十三・十四坪出土のハソウ（第 4 図 4）は糸切りであることから、産地を特定できる可能性がある。なお、このハソウも胴部最大径の下位に孔があげられ、平城京左京九条三坊十坪 SE3755 の大型壺形ハソウ（第 4 図 7）と類似することから、ハソウの一つの形態として認識されていた可能性がある。

一方、平城京左京三条二坊 SD5100 溝状土坑のハソウが尾張産ならば、平城京三条大路の SX0603 廃棄Ⅰのハソウも口縁形態が共通することから尾張産の可能性があり、このような長い注口が付くハソウが生産されはじめたのであろう。平城宮・京のハソウが平城宮Ⅲ以降大型の壺型が見られること、平城京三条大路 SX0603 廃棄Ⅰの長い注口を持つハソウ（第 4 図 11）の存在からも、それまでのハソウと用途や性格など変化があった可能性が想定できる。

4 文献と考古学にみる甕の用途

文献に見る甕の用途

荒井は、『延喜式』で土器のハソウは、主計式の「甕」のほかに「匱」が、四時祭式上・下と造酒式に類出するほか、斎宮式の30野宮供新嘗料条・37野宮年料供物条・66供新嘗料条・71年料供物条と大嘗祭式17雑器条・27供神雑物条に見え、いずれも神祭用である。」とする。また、『和名抄』に「柄中有_レ道、可_レ以_レ注_レ水之器也」と胴部の小さい孔に竹管をつけ、手洗い水などを入れる容器で、造酒式に「陶匱六十口…、篋竹卅株〈作_レ匱口_レ及_レ飾柄料〉」とあることから、考古学でいうハソウの器形とし、『和名抄』から手水を入れたと考えている〔荒井 2005〕。土器ハソウの容量は7世紀代に50cc前後、8世紀に増えたとしても100cc前後であり、手水に使うには少なすぎるのではなからうか。

造酒式9に鎮魂祭料として、酒とともに都婆波四口、坩四口、土盞四口、小匱四口、缶一口、篋竹六株などが供神料として見られる。この小匱は造酒式10新嘗會白黒二酒料(1カ所)、造酒式34供奉年料(1カ所)にも見られることから、小匱は酒と関わる器と想定できるのではなからうか。

小匱は『延喜式』の中でわずか3カ所に見られるだけであるが、小匱の存在から匱には大小あると考えた場合、匱が五升(今量にして4050cc〔荒井 2004 p64〕)とすれば、小匱はそれよりも小さい器形をさし、用途も異なっていたのではなからうか。

考古学に見るハソウの用途

三宅米吉は、「匱は酒を盛る器と見えて大抵、小盞、甕、酒垂、都婆波等と並べたり。(中略)。匱は大嘗式供神料に「都婆波卅二口〈十六口別酒一斗十六口五升各以八口置於一案〉」とあれば大なるものにて酒を盛りて神に供ふる器なり、(略)」とする〔三宅 1897〕。三宅以来、考古学では古墳時代のハソウを祭儀で使う場合、酒を入れたと考えている〔後藤 1935〕。

浜松市郷ヶ平6号墳出土埴輪の持つハソウは、長い注口が付くことから竹管を挿し込んでおり、巫女が両手で持ち液体を注ぐ行為を表現している。同様に長野県松本市平田里1号墳〔松本市教育委員会 1994〕の注口の付いた埴輪の樽形ハソウも同様であろう。福島県本宮町天王壇古墳の樽形ハソウ形埴輪〔川崎義夫ほか 1984〕は注口は付着しないが、巫女の埴輪とともに出土し、土器儀礼の容器と解することができる。このように古墳で使用するハソウ・樽形ハソウは、祭祀・祭儀・儀礼の道具で、液体を注ぐ容器である。事実、出土する古墳時代のハソウには孔の周囲、特に下位が剥離している例がある。これは中の液体が竹管との隙間から漏れないよう竹管を強く挿し込み密着させたため孔下位の薄い部分が剥離したと想定できる。

高橋克壽は、墳丘や造出しの祭祀に大甕など液体貯蔵器種が現れ、ハソウも出土することから、造出しの祭祀が献杯や酒宴の要素を色濃くしているとする〔高橋 1988〕。山田俊輔は、須恵器の大甕と器台を中心とした土器祭式の類型と変遷を分析したが、大甕を用いた祭式は須恵器製作の将来とともに列島へ伝えられたとする〔山田 2014〕。新来の土器祭式には会食儀礼と食物供献儀礼があるが、大甕に伴う土器の中にはハソウが出土するBJ2類、S1類、S2類があり、大甕とハソウの用いられ方はいくつかの方法があると想定される。篠原祐一は、須恵器大甕について神や祖霊を祭

祀する際の献供の具、または、地縁・血縁などの紐帯を確認するための「郷飲酒礼」に用いられた特別な器であった。その中身は、基本的には酒であり、玄酒と称する水の例もあった可能性を指摘している〔篠原 2006〕。考古学ではハソウは、大甕とともに儀礼の場で飲酒の容器として機能した可能性を考えることが多いが、玄酒は酒の代用とするものの水なのかは不明である。

このようにハソウは酒を入れた儀礼の土器と考えられる場合が多いが、主計式の甕や多志羅加が手水を入れたならば、古墳時代の須恵器のハソウは酒ではなく水の容器となろうか。初期須恵器のハソウは120ccから260ccあり、初期須恵器に大型ハソウや樽形ハソウの存在を考えると、酒か手水か判断がつかない。しかし、6世紀以降では容量が150～50ccとわずかとなり、手水としては少なすぎる。酒としても同様であるが、6世紀にハソウは古墳や祭祀遺跡などから出土し、大甕や瓶類など容器類と伴うことからやはり儀礼の中で酒を入れた可能性があろう。

5 ハソウの終焉と延喜式の甕 —甕から多志羅加へ—

8世紀初頭以降考古学資料のハソウは消滅傾向にあり、平安時代の主計式の甕と時期差があることからどのような関係が考えられるのか検討してみる。また、同じ注口を持つハソウと多志羅加の関係についても探ることとする。

荒井は、主計式に見る土器がどの時代のものであるかについて、8世紀後半を中心とする土器とする〔荒井 2005〕。須恵器のハソウは和泉（陶邑窯）美濃（美濃須衛窯）、備前（邑久窯）が主計式で調として貢納していたようであるが、それぞれの地域でハソウの生産は、8世紀初頭あるいはやや降っても前半までのことである。ただ、美濃では8世紀第4四半期まで断続的に確認できる。また、調納国ではないが、尾張でも井ヶ谷67号窯や、NN-32号窯式段階の8世紀第3四半期までハソウはまだ製作されている。

平城京では左京三条二坊SD5100溝状土坑の大型ハソウは平城宮Ⅲ期の尾張産である〔愛知県史編さん委員会 2015〕。類似する平城京三条大路のSX0603廃棄Ⅰの大型ハソウも尾張と考えられるならば、8世紀第3四半期まで貢納されていた可能性はある。考古学資料から考えると『延喜式』の土器は、和泉・備前・三河のハソウの生産が早く終わっていることから8世紀前半までの内容であろう。貢納須恵器が交易により調達していた〔古尾谷 2006〕としても、尾張・美濃以外ではほとんど生産していないことから、交易による入手も不可能であろう。しかし、尾張・美濃が生産を続け、「小匱」だけでなく、大型ハソウも生産し貢納されたことは、大嘗祭式の宮内省史生派遣により、甕が継続して作られたためであろう。順次土器のハソウに代わり、大型の木器椀に変化し、容量の大きい多志羅加の器形も作られるようになったのであろう。

荒井は、ハソウについて「神今食に用いられるほかはすべて新嘗祭（大嘗祭）の祭具」とし、「多志羅加は新嘗祭（大嘗祭）専用の土器となる」、「天皇の手水を入れる器。腹に注口がある器高のあるもの」とし、「甕（匱）」に類似する。「注ぎ口までも器の一部である考古学用語の注口土器が多志羅加、注ぎ口を竹管で継ぐのがハソウとなろう」とする。また『御讓位御即位御契行幸大嘗会仮字記』に「たしらかと云は御手水の時のはんさふの代也」という〔荒井 2005〕が、甕と多志羅加は類似する器形、用途なのであろう。

多志羅加は、記録に残された図から縦長の蓋を持つ急須形の注口土器のようであるが、祭儀で使

い、水を入れる容器であろう。多志羅加が文献に見えるのは、甕よりも新しいことから、「ハンゾウノ代也」のように、須恵器のハソウから系譜をたどれる器形であろう。しかし、斎宮式66供新嘗料条に美濃国産、大嘗祭式17雑器条に三河国産が見えるが、出土品に長い注口を持つ器形は見当たらない。

『延喜式』に甕は五升(4050cc)、多志羅加は一斗(8100cc)とあるが、ハソウは美濃老洞窯跡の大型ハソウや、平城京の尾張産の大型ハソウ、あるいは、平城京東堀河SD1300の壺Lなどが「五升」の甕として該当しよう。また、「一斗」の多志羅加は、荒井のいうように長い注口を持つならば、平城京三条大路のSX0603廃棄Iのハソウが該当しよう。

8世紀中葉以降、須恵器の大型ハソウが見られるようになってきたが、これはより多くの手水を入れるための器形であろう。7世紀末から8世紀初頭の木製台付甕が、鳥取市青谷横木遺跡〔鳥取県埋蔵文化財センター2018〕等から出土することから考えて、大型の木製甕が作られたり、多志羅加に変化していったのであろう。

おわりに

主計式の土器について特殊器形であり、古代史と考古学で合致する器形である甕を使い、貢納していた土器はいつの土器かを探ってみようとした。尾張・美濃で8世紀第3四半期や第4四半期まで生産されているものの、その他の調納国では8世紀前半には生産を終えていることから、ハソウからみるならば主計式の内容は8世紀前半までの土器について記されている可能性が高い。

古墳時代のハソウ出現期以降200cc前後であったが、7世紀になると50ccと容量が激減する。しかし、奈良時代に再び容量が増えることに注目したい。細い竹管を挿すことから、液体を小さな器に注ぐ器形だと推測できる。しかもわずかな量である。ハソウは、古墳時代には大甕や瓶類など容器類に伴い、埴輪にも模される器形であることから、祭祀・祭儀・儀礼の道具のためにわずかな酒を入れて使用した可能性が高い。

8世紀になり、美濃の老洞窯跡ではそれまでにない大型ハソウが作られていることから、その内容物は手水を入れるように変化していったと考えたい。それが後には容量の大きな木製の「椀」になったのであろう。また、平城京で出土した水注と考えられるミニチュアのハソウ(第4図1・2)は、水滴として水を入れたことからハソウと水との関わりが8世紀初頭にはあったのであろう。

一方小型ハソウの中には、古墳時代の使用方法を継続した場合もあったようである。小匱は造酒式9に鎮魂祭料として、酒とともに都婆波四口、埴四口、土蓋四口、小匱四口、缶一口、篋竹六株などが供神料として見られ、造酒式10新嘗會白黒二酒料(1カ所)、造酒式34供奉年料(1カ所)にも見られることから、小型ハソウは酒と関わる容器として継続して使われたと考えられる。このように奈良時代のハソウは、酒か水を入れる容器として作られ、使用されたが、水を入れるハソウは容量を増すため椀など木器の容器が作られるようになったのであろう。

本稿の執筆にあたっては、荒井秀規氏、小田裕樹氏、亀田修一氏、後藤建一氏、城ヶ谷和広氏、渡邊博人氏らにご教授いただきました。感謝申し上げます。

引用参考文献

- 愛知県教育委員会 1980『愛知県猿投西南麓古窯跡群分布調査報告書(Ⅰ)』
- 愛知県教育委員会 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告書(Ⅲ)(尾北・三河地区)』
- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史別編窯業1 古代猿投系』
- 荒井秀規 2004「延喜主計式の土器について(上)」『延喜式研究』第20号 延喜式研究会
- 荒井秀規 2005「延喜主計式の土器について(下)」『延喜式研究』第21号 延喜式研究会
- 大阪府教育委員会 1994『泉州における遺跡の調査Ⅰ 陶邑Ⅷ』
- 大阪文化財センター 1978『陶邑Ⅱ』
- 大阪文化財センター 1979『陶邑Ⅳ』
- 大阪文化財センター 1982『陶邑Ⅴ』
- 岡山県教育委員会 1978『寒風古窯址群』
- 各務原市教育委員会 1981『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 1996『太田1号古窯跡群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 1998『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯跡群発掘調査報告書』
- 亀田修一ほか 2014『備前邑久窯跡群の研究—西日本における古代窯業生産の研究—』(平成22～25年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書) 岡山理科大学考古学研究室
- 川崎義夫ほか 1984『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書8
- 岐阜県文化財保護センター 2000『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』
- 岐阜市教育委員会 1981『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 小池 寛 1999「臆考」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 後藤建一 2015『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
- 後藤守一 1935「須恵器」『陶器講座』第一巻 雄山閣
- 篠原祐一 2006「須恵器大甕祭祀」『栃木県考古学会誌』27 栃木県考古学会
- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—』第5分冊 補遺・論考編 東海土器研究会
- 鈴木敏則 2014「湖西窯における須恵器生産—湖西産須恵器—」『海の古墳を考えるⅣ—列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流—』
- 高橋克壽 1998「古墳築造システムの展開—5世紀における古墳祭祀の変革—」『中期古墳の展開と変革』第44回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会
- 巽 淳一郎 1992『平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定』平成元年～3年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告
- 巽 淳一郎 1998「平城京の須恵器」『研究集会「古代律令国家の須恵器調納制を考える」発表資料』奈良国立文化財研究所
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 虎尾俊哉編 2000『訳注日本史料 延喜式』上 踐祚大嘗祭17 集英社
- 中村 浩 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 奈良県立橿原考古学研究所 2011『平城京三条大路Ⅰ』奈良県文化財調査報告書第139集
- 奈良県立橿原考古学研究所 2015『平城京左京三条二坊十一・十二・十三・十四坪』
- 奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ』
- 奈良国立文化財研究所 1986『平城京左京九条三坊十坪発掘報告書』
- 奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所 1996『平城京長屋王邸跡—左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書』
- 奈良国立文化財研究所 1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
- 奈良国立文化財研究所編 1983『平城京東堀河 左京九条三坊の踏査』

-
- 古尾谷知浩 2006「文献資料から見た古代における土器の生産・流通」『古代中世の社会変動と宗教』吉川弘文館
松本市教育委員会 1994『出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群』松本市文化財調査報告
三宅米吉 1897「上古の焼物の名称」『考古学会雑誌』第1巻第9・12号
柳浦俊一 2001「鳥根県東部（出雲）の切り離し技法と長頸壺頸部接合技法」『古代の土器研究』第6回シンポジウム
山田俊輔 2014「須恵器を中心とする土器祭式の系譜」『古代』133, 早稲田大学考古学会

(駒澤大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年9月18日受付, 2019年2月6日審査終了)